

# 『マハーバーラタ』 第12巻

## 「ラージャダルマ章」 訳注 (1)

沼田 一郎

### 「ラージャダルマ章」の概要

『マハーバーラタ』 (*Mahābhārata* : 以下 *MBh*) は全18巻からなり、クルー族とパンドゥー族の王位継承権を巡る闘争を描く叙事詩である。そのうち第12巻「シャーンティ・パルヴァン (Śānti-parvan)」(寂靜の巻) は、以下の3つの部分 (sub-parvan) から構成されている。

- [1] 1 - 128 : ラージャダルマ (Rāja-dharma : 王のなすべきこと)
- [2] 129 - 167 : アーパッドダルマ (Āpad-dharma : 非常時になすべきこと)
- [3] 168 - 353 : モークシャダルマ (Mokṣa-dharma : 解脱のためになすべきこと)

「シャーンティ・パルヴァン」そのものは *MBh* のメインストーリーとは離れており、第13巻の「アヌシャーサナ・パルヴァン」とともに後代の付加であるとも考えられている<sup>1</sup>。それぞれの sub-parvan が「…ダルマ」と名付けられていることから考えても、ストーリーの展開ではなく、*MBh* という枠を使って何らかの「なすべきこと」「教説」を語ることを目的としていると考えることができる。[2] と [3] に関しては、これまでに多くの研究があり、とりわけ [3] は古代インドの宗教思想の集大成とも称される内容を有していることから、内外で多数の翻訳・研究成果が発表されている<sup>2</sup>。本稿で [1] に注目するのは以下のよう

<sup>1</sup> [中村 2017:8]

<sup>2</sup> [2] については、[山崎 1994] [Bowles 2007]、[3] は [茂木 1993-] [中村 1998, 2000] [三澤 2015] などがある。

な理由による。

[1] はプーナ批判版 (P) で4500偈を超える大部なセクションであり、主題は上記の通り「王のなすべきこと」である。これはいわゆる「王権論」と称されるものであり、*MBh*のメインストーリーが王位継承権を巡る闘争であることと整合性があるだろう。古代インドの王権論については、ヴェーダ文献による王権儀礼の研究の他、『マヌ法典』を始めとするダルマ文献、カウティリヤの『実利論』、仏教文献、あるいは碑文等を用いた研究が多くあり、それらには歴史学との接点も見出すことができる<sup>3</sup>。成立年代や地域などが確定し難いという点では、*MBh*はこれらの資料と同様だが、それでもとりわけ [1] は、古代インドの王権論を論じる際には必ず参照するべきものである。筆者もこれまでにダルマ文献等を資料としてこの課題を扱ってきたが、[1] の読解と文献学的な検討が必要であると考えている。我が国では[山崎 1994]が内容を検討し、それがダルマ (dharma) を最高原理としている点で、ダルマ文献と共通するものであることを明らかにした。また、井狩彌介を代表者とする研究班は共同研究「権力と権威—古代インドにおける王権と宗教伝承の諸相—」を実施して、その成果の一部を科研の報告書としている<sup>4</sup>。[原 1968<sup>1</sup>,1968<sup>2</sup>,1969] は、*MBh*からkṣātra-dharma (クシャトリヤのなすべきこと) の用例を網羅的に収集して、それを「武士道」としたが、当然ながらそれはrāja-dharmaと重なる要素を多く含んでいる<sup>5</sup>。また、近年出版された [McGarth 2017] は、パーンドゥー族の長男であるユディシュティラ (Yudhiṣṭhira, 以下Yとする) に注目して、*MBh*における王のあり方を探り、主として第3章「王権の理想 (Ideals of Kingship)」の中で [1] に言及している<sup>6</sup>。

[1] はふたつのセクションに分けることができる。Yは大戦争終了後、バラタ族の王位に就くことになるが、出生の事情からクル側にいた長兄カルナ (Karna) を戦争中に殺してしまったことを悔いている。具体的

<sup>3</sup> [山崎 1994] [沼田 2004, 2005] など。

<sup>4</sup> [井狩 2001]

<sup>5</sup> [原 1968<sup>1</sup>: 02]

<sup>6</sup> [McGarth 2017: 129-166]

な「王のなすべきこと」を説く前に、Yを説得して王としての自覚に目覚めさせねばならないのである。そして、最終的にはビーシュマ(Bhīṣma)の説得が奏功する。ここまでが[1]の第1部である。続く12.56から128までが第2部であり、ここで「王のなすべき事」すなわち rāja-dharmaが具体的に示されるのである。[1]全体は以下のように科段分けすることができる<sup>7</sup>。

ラージャダルマ章 (Rājdharmaparvan) の科段			
1. Yがバラタ族の王になる	1-55	2.8 Vāmadevaの説くダルマ	93-95
1.1 Karṇaの運命	2-6	2.9 征服・統治・戦闘・外交	96-104
1.2 Yへの説得	7-38	2.10 Kṣemadarśinの物語	105-107
1.3 YがHasināpura入城	39-44	2.11 王の行動原理と心構え	108-109
1.4 Kṛṣṇaが教えを説かせる	45-55	2.12 難局に対処する	110-115
2. Bhīṣmaの教え	56-128	2.14 王の臣下(2)	116-119
2.1 rājadharmā序論	56-59	2.15 生類保護	120
2.2 職務全般と生活形態	60-66	2.16 daṇḍaの起源	121-12
2.3 国家には王権が必要	67-71	2.17 ダルマ・アルタ・カーマ	123
2.4 バラモンとの関係	72-79	2.18 良い習慣	124
2.5 王の臣下(1)	80-86	2.19 Sumitra仙と鹿の逸話	125-126
2.6 都市と国家の統治	87-91	2.20 負債、弱き王の務め	127-128
2.7 Utathyaの説くダルマ	91-92		

[原 1968<sup>1</sup>:303] が指摘したように、戦場において死を厭うことなく戦うことを趣旨とする「クシャトラダルマ」すなわち武士道は、平時においては「ラージャダルマ」となる。それを初めて全面的に展開したのは『マヌ法典』(*Manusmṛiti*)であり、そこでは政治、経済の他、司法・裁判(vyavahāra)が主要な位置を占めている。しかし、本稿で扱うMBhの「ラージャダルマ」には司法・裁判が含まれない<sup>8</sup>。

[井狩 2001] は第56節(12.56.1)以降の検討結果を記載する。これは上記の科段分けからもわかるように、実質的な内容がこの節に始まるか

<sup>7</sup> cf. [井狩 2001] [Fitzgerald 2004: 165-6]

らだが、本稿では冒頭の第1節(12.1.1)から始めることにする。

翻訳の底本は、プーナ批判版Sukhtankar et al. ed., 1961, *The Mahābhārata*, vol.13, pt. 1, Poona.<sup>9</sup> (P)とし、故徳永宗男氏によるe-text<sup>10</sup>も参照した。「ラージャダルマ章」全体を通じた翻訳として参照したのは以下のものである。

Ganguli, K. M., 1981, *The Mahabharata*, vol.8, New Delhi.

Dutt, M.N., 1988, *Mahabharata*, vol. 12, Delhi.

Fitzgerald, J.L., *The Mahābhārata*, vol. 7, Chicago.

Debroy, B., 2013, *The Mahabharata*, vol. 8, New Delhi.

### 【訳注】

vaiśampāyana uvāca

kṛtodakās te suhr̥dām sarveṣām pāṇḍunandanāḥ /

viduro dhṛtarāṣṭras ca sarvās ca bharatastriyaḥ /12.1.1

ヴァイシャンプーヤナは言った。

すべての友のための水の儀礼<sup>11</sup>を終えたパンドウの息子たち、ヴィドウラ、ドゥリタラーシュトラ、そしてバラタ族のすべての女たち。

tatra te sumahātmāno nyavasana kurunandanāḥ /

śaucaṃ nivartayiṣyanto māsam ekaṃ bahiḥ purāt /12.1.2

いと高さ心持つそれら<sup>12</sup>クルの息子たちは、そこにとどまっていた。[ハスティナープラの] 都の城外で、ひと月の間 [自身を] 浄化しようとして。

---

<sup>8</sup> これは「ダルマ」ではなく「アルタ」(artha)の学問において発展したものと思われる。萌芽的には古層のダルマストラ文献にも見られるが、『マヌ』において「アルタ」に属するカウティリヤの『実利論』(*Kauṭilya Arthasāstra*)から継受したものであろう。詳しくは[沼田 2022]。

<sup>9</sup> [上村] [井狩] [Fitzgerald] [Debroy] はPを用いているが、[茂木] [中村 1998, 2000] はKinjawadekar本を底本としている。また、[中村 2017] はKinjawadekar本に加えてカルカッタ本も用いている。

<sup>10</sup> <http://www.cc.kyoto-su.ac.jp/~yanom/sanskrit/mahabharata/> (2022年11月7日)

<sup>11</sup> 死者儀礼である。cf. [徳永 2002]。

kṛtodakam tu rājānaṃ dharmātmānaṃ yudhiṣṭhiram /  
abhijagmur mahātmānaṃ siddhā brahmaṛṣisattamāḥ /12.1.3

水の儀礼を済ませたダルマの体現者<sup>13</sup>である王Yに、高き心持つ聖者たちと最も優れたバラモン聖人たちが近づいた。

dvaipāyano nāradaś ca devalaś ca mahān ṛṣiḥ /  
devasthānaś ca kaṇvaś ca teṣāṃ śiṣyāś ca sattamāḥ /12.1.4

ドゥヴァイパーヤナ、ナーラダ、そして偉大な仙人であるデーヴァラ、デーヴァスターナ、カンヴァ、そして彼らのもっともすぐれた弟子たちが [近づいた]。

anye ca vedavidvāṃsaḥ kṛtaprajñā dvijātayaḥ /  
gṛhasthāḥ snātakāḥ sarve dadṛṣuḥ kurusattamam /12.1.5

ヴェーダを知り知恵を備えた他のバラモンたちは、沐浴を終えた家庭生活者であり、彼らもクルの最も優れた者 (Y) と面会した。

abhigamya mahātmānaṃ pūjitāś ca yathāvidhi /  
āsaṇeṣu mahārheṣu viviśus te mahṛṣayaḥ /12.1.6

高き心持つその偉大な仙人たちは、近づいて作法通りにもてなされ、豪華な座席に腰かけた。

pratigṛhya tataḥ pūjāṃ tatkalasadr̥ṣīm tadā /  
paryupāsan yathānyāyaṃ parivārya yudhiṣṭhiram /12.1.7

そしてその場にふさわしいあいさつを受け、Yを囲んで正しく座ったのである。

punye bhāgīrathītīre śokavyākulacetasam /

<sup>12</sup> [渡瀬 2013] は *Manu* における mahātman を 〈心高邁な〉 (1.4, 1.41, 1.61)、〈偉大な〉 (5.1) と訳す。

<sup>13</sup> Y はダルマ神の化身とされる。dharma-ātman は、*Manu* 5.3, 12.2 に用例があり、Kullūka 注によると「ダルマを第一とする (dharmapradhāna)」 「ダルマを本性とする (dharmasvabhāva)」。 *Rānāyaṇa* 1.1.29 では、ラーマの良き人柄を形容する。

āśvāsayanto rājānaṃ viprāḥ śatasahasraśāḥ /12.1.8

幾千万のバラモンたちが、めでたきガンガー<sup>14</sup>の岸辺で煩悶する王（Y）を慰めたのである。

nāradas tv abravīt kāle dharmātmānaṃ yudhiṣṭhiram /

vicārya<sup>15</sup> munibhiḥ sārđhaṃ tatkālasadṛśaṃ vacaḥ /12.1.9

その時、ナーラダはダルマを体現するYに言った。賢者たちと共に思いを凝らして、その場にふさわしい言葉を。

bhavato bāhuvīryeṇa prasādān mādhavasya ca /

jiteyam avaniḥ kṛtsnā dharmeṇa ca yudhiṣṭhira /12.1.10

Yよ。あなたの腕力とクリシュナの恩寵によって、この大地はあまねくダルマに征服されている<sup>16</sup>。

diṣṭyā muktāḥ stha<sup>17</sup> samgrāmād asmāl lokabhayaṃkarāt /

kṣatradharmarataś cāpi kaccin modasi pāṇḍava /12.1.11

あなたたちは、世界を恐怖に陥れたこの戦いから運よく生還した。あなたはクシャトラダルマを楽しんでいるのにどうして悲しむのだ、パーンドゥの子（Y）よ。

kaccic ca nihatāmitraḥ prīṇāsi suhṛdo nṛpa /

kaccit śriyam imāṃ prāpya na tāṃ śokaḥ prabādhate /12.1.12

王よ、あなたは敵を滅ぼしたのだから味方を喜ばせてほしい。この栄光を手に入れたのだから、憂いに苦しまないでほしい。

yudhiṣṭhira uvāca /

<sup>14</sup> バギーラタ王（Bhagīratha）の苦行によってガンガーが地上に降下したという伝説がある。cf. [上村 2006 :104-114]

<sup>15</sup> K<sub>2</sub>,D<sub>1</sub>:viśamya「[Yを]宥めて」。K<sub>4,5</sub>,B,Da,Dn.D<sub>2,3,5,8</sub>,Ca:sambhāṣya「語り合って」。

<sup>16</sup> 「大地がダルマによって征服されている」という表現はしばしば用いられる。1.11.65, 1.14.14, 12.12.36, 12.20.31, 12.28.58, 14.10.7。

<sup>17</sup> [Tokunaga] sma

vijiteyaṃ mahī kṛtsnā kṛṣṇabāhubalāśrayāt /  
brāhmaṇānāṃ prasādena bhīmārjunabalena ca /12.1.13

Yは言った。

クリシュナの腕力のおかげでこの大地はあまねく征服された。バラモン方の恩寵とビーマとアルジュナの力によって。

idaṃ tu me mahad duhkhaṃ vartate hṛdi nityadā /  
kṛtvā jñātikṣayam imaṃ mahāntaṃ lobhakāritam /12.1.14

だが、私の心には大いなる苦しみの絶えることがない。欲望のために、このような親族の全滅をもたらしたのだから。

saubhadraṃ draupadeyāṃś ca ghātayitvā priyān sutān /  
jayo 'yam ajayākāro bhagavan pratibhāti me /12.1.15

スバドラーの子<sup>18</sup>とドラウパディーの愛し子たちを死なせてしまい、この勝利は、私にはまるで敗北のように思える。

kiṃ nu vakṣyati vārṣṇeyī vadhūr me madhusūdanam /  
dvārakāvāsiniṃ kṛṣṇam itaḥ pratigataṃ harim /12.1.16

私の義妹 [であるスバドラー] は、ドゥヴァーラカーの住人にしてヴェリシュニ族である。彼女はマドゥの殺戮者たるクリシュナに何を語るであろうか。そこから帰還したハリ（クリシュナ）に。

draupadī hataputreyam kṛpaṇā hatabāndhavā /  
asmatpriyahite yuktā bhūyo pīḍayatīva mām /12.1.17

息子を失い親族を失ったこの憐れなドラウパディーは、一心に私たちを喜ばせようとするが、余計に私を苦しめている。

idam anyac ca bhagavan yat tvāṃ vakṣyāmi nārada /  
mantrasaṃvaraṇenāsmi kuntyā duḥkhena yojitaḥ /12.1.18

ナーラダ殿、私はあなたに言いたいことがある。クンティーが秘密を隠

<sup>18</sup> アルジュナと妻スバドラーから生まれたアビマニユ（Abhimanyu）のこと。

した<sup>19</sup>ために私は苦しんでいる。

yo 'sau nāgāyutabalo loke 'pratiratho raṇe /  
siṃhakhelagatir dhīmān ghrṇī dānto yatavrataḥ /12.1.19

1万頭の象に匹敵する力をそなえ、この世の戦闘では比類なき戦車を駆り、ライオンのように身ぶるいしながら歩み、思慮あり、情熱的で身を慎み、戒を守る。

āsrayo dhārtarāṣṭrāṇāṃ mānī tikṣṇaparākramaḥ /  
amarṣī nityasaṃrambhī kṣeptāsmākaṃ raṇe raṇe /12.1.20

ドゥリタラーシュトラの子孫たちにとっては誇るべき拠り所であり、情熱的で勇敢であり、奮い立ち、常に昂ぶり、戦いごとに我々を撃ち、

śiḡhrāstrāś citrayodhī ca kṛtī cādbhutavikramaḥ /  
gūḍhotpannaḥ sutaḥ kuntyā bhrātāsmākaṃ ca sodaraḥ /12.1.21

武器を素早く放ち、自在に戦い、巧みであって未曾有の武勇を持っている。クンティーが密かに産み落とした、私たちにとっては同腹の兄なのだ。

toyakarmaṇi yaṃ<sup>20</sup> kuntī kathayāmāsa sūryajam /  
putraṃ sarvaguṇopetam avakīrṇaṃ jale purā /12.1.22

死者への水供儀の際、クンティーは彼（カルナ）を太陽神の息子であると語った。その子はあらゆる徳を備えていたが、[出産後]すぐに水中に投げられた。

yaṃ sūtaputraṃ loko 'yaṃ rādheyaṃ cāpy amanyata /  
sa jyeṣṭhaputraḥ kuntyā vai bhrātāsmākam ca mātṛjaḥ /12.1.23

スータとラーダーの息子としても世に知られたこの者は、クンティーの長男であり、わたしたちの兄であり、母から生まれたのだ。

---

<sup>19</sup> 以下に示されるように、カルナが自分の兄であるということ。

<sup>20</sup> K<sub>2-4</sub>とD4以外：taṃ

ajānatā mayā saṃkhye rājyalubdhena ghātitaḥ /  
tan me dahati gātrāṇi tūlarāśim ivānalaḥ /12.1.24

私は知らずに、戦いの中で王権への欲望のために彼を殺したのである。  
そのことが私の肢体を焼き焦がす。炎が綿の塊<sup>21</sup>をそうするように。

na hi taṃ veda pārtho 'pi bhrātaraṃ śvetavāhanaḥ /  
nāhaṃ na bhīmo na yamau sa tv asmān veda suvrataḥ /12.1.25

白馬を駆るブリターの子（アルジュナ）も彼（カルナ）を兄とは知らず、  
私もビーマも、また〔ナクラとサハデーヴァの〕双子も同じだった。し  
かし、正しい戒を保つ彼（カルナ）は私たちのことを知っていた。

gatā kila pṛthā tasya sakāśam iti naḥ śrutam /  
asmākaṃ śamakāmā vai tvaṃ ca putro mamety atha /12.1.26

私たちは聞いたことがある。かつてブリター（クンティ）は、私たち  
との和解を望んで彼（カルナ）の前に来て、「あなたは私の子です」と言っ  
た、と。

pṛthāyā na kṛtaḥ kāmas tena cāpi mahātmanā /  
atipaścād idaṃ mātarī avocad iti naḥ śrutam /12.1.27

心高邁な〔カルナ〕はブリターの望みを叶えることなく、続いてこのよ  
うに母に言った、と私たちは聞いた。

[カルナは言った]

na hi śakṣyāmy ahaṃ tyaktaṃ nrpaṃ duryodhanaṃ raṇe. /

<sup>21</sup> [Fitzgerald 2004 : 67] は、これを pile of straw（藁束）と訳す。その理由として、  
note (p.679) で「速く燃えることの喩えだから、tūlaは「綿」よりも植物に生じ  
る若芽や小枝（穂、枝、葉）とするのが適切だ（趣意）」と説明する。MBhでは、  
tūlaは-rāśi（束、塊）との複合語で「燃える」比喻（6.82.38, 7.20.19）として使用  
されることが多い。ただし、私にはそれらが綿より「速く燃える」かどうかはわ  
からない。その一方で、「メール山から落ちた」ことを喩える「tūla-rāśiの上に〔ふ  
わりと〕落ちたように」（1.116.41）、あるいは「風がtūla-rāśiを吹き飛ばすように」  
（8.19.1, 8.44.24）の場合には、若芽や小枝より「綿」が適切ではないかと思う。

anāryaṃ ca nṛśaṃsaṃ ca kṛtaghnaṃ ca hi me bhavet /12.1.28

「戦闘中は、私はドゥルヨーダナ王を見捨てることができないでしょう。私は非道、非情、不義理をすることになってしまいます。」

yudhiṣṭhiraṇa saṃdhiṃ ca yadi kuryāṃ mate tava /

bhīto raṇe śvetavāhād iti māṃ maṃsyate janaḥ /12.1.29

「あなたの思うとおりに私がYと和平するとしても、人は私が白馬の騎士（Y）を怖れたからと考えるでしょう。」

so 'haṃ nirjitya samare vijayaṃ saha keśavam /

saṃdhāsye dharmaputreṇa paścād iti ca so 'bravīt /12.1.30

「この私は、戦闘中にヴィジャヤ（アルジュナ）とケーシャヴァ（クリシュナ）に勝利して、その後にダルマ神の子（Y）とともに平和を築くでしょう」と彼（カルナ）は言った。

tam avocat kila pṛthā punaḥ pṛthulavakṣasam /

caturṇām abhayaṃ dehi kāmaṃ yudhyasva phalgunam /12.1.31

プリター（クンティ）は、広い胸板を持つ者（カルナ）に再び言った。「4人の弟<sup>22</sup>に無怖を与えなさい。パルグナ（アルジュナ）とは思いうまに戦いなさい」と。

so 'bravīn mātaraṃ dhīmān vepamānaḥ kṛtāñjaliḥ /

prāptān viśahyāṃś caturō na haniṣyāmi te sutān /12.1.32

思慮深い者（カルナ）は、合掌して泣きながら母にこう言った。

「あなたの4人の子を捕らえたとしても、殺すつもりはありません。」

pañcaiva hi sutā mātaraḥ bhaviṣyanti hi te dhruvam /

sakarṇā vā hate pārthe sārjunā vā hate mayi /12.1.33

「お母さん、間違いなくあなたの息子は5人です。プリターの子（アルジュナ）が死んでもあなたにはカルナがいる。私が死んでもあなたにはアル

---

<sup>22</sup> アルジュナを除くパーンドゥ兄弟たち。

ジュナがいるのだから。」

tam putragṛddhinī bhūyo mātā putram athābravīt /  
bhrātṛṇām svasti kurvīthā yeṣām svasti cikīrṣasi /12.1.34

息子たちの「幸せを」願う母は、その息子に重ねて言った。  
「あなたが幸せにしようと思う弟たちを幸せにしてちょうだい」と。

tam evam uktvā tu pṛthā viśṛya upayayau gṛhān /  
so 'rjunena hato vīro bhrātā bhrātrā sahodarah. /12.1.35

彼にこう言ってから、プリター（クンティ）は別れて家に戻った。  
その勇者（カルナ）はアルジュナに殺された。同腹の弟によって兄が殺されたのである。

na caiva vivṛto mantraḥ pṛthāyās tasya vā mune /  
atha śūro maheṣvāsaḥ pārthenāsau nipātitaḥ /12.1.36

聖者よ、プリター（クンティ）も彼（カルナ）も秘密を洩らさなかった。そうして勇敢にして偉大なる射手（カルナ）は、プリターの子（アルジュナ）に倒されたのである。

ahaṃ tv ajñāsiṣaṃ paścāt svasodaryaṃ dvijottama /  
pūrvajaṃ bhrātaraṃ karṇaṃ pṛthāyā vacanāt prabho /12.1.37

しかし、バラモンの最上者<sup>23</sup>よ。私は後から母を同じくする兄カルナを知ったのだ、バラモンよ。プリター（クンティ）の言葉によって。

tena me dūyate 'tīvahṛdayaṃ bhrātrḡhātinaḥ /  
karṇārjunasahāyo 'haṃ jayeyam api vāsavam /12.1.38

それゆえに、兄を殺した私の心は悲しみにくれている。カルナとアルジュナがいっしょなら、ヴァーサヴァ（インドラ神）をも倒したであろうに。

sabhāyām kliśyamānasya dhārtarāṣṭrair durātmabhiḥ /

<sup>23</sup> ここでは、Yの対話者であるナーラダを指す。

(110)

sahasotpatitaḥ krodhaḥ karṇaṃ dr̥ṣṭvā praśāmyati /12.1.39

ドゥリタラーシュトラの、心下劣な息子たちが広間で私を苦しめたとき、突如として燃え上がった私の怒りは、カルナを見ると鎮まったのである。

yadā hy asya giro rūkṣāḥ śṛṇomi kaṭukodayāḥ /

sabhāyāṃ gadato dyūte duryodhanahitaīṣiṇaḥ /12.1.40

広間でのサイコロ賭博の折に、ドゥルヨーダナのためを思って話す、彼（カルナ）の厳しく鋭い言葉を私が聞いたとき、

tadā naśyati me krodhaḥ pādaḥ tasya nirīkṣya ha /

kuntyā hi sadṛṣau pādaḥ karṇasyeti matir mama /12.1.41

そのとき彼の両足を見て、私の怒りは消えたのだ。カルナの両足はクンティのそれとよく似ている、と私は思った。

sādṛśyahetum anvicchan pṛthāyās tasya<sup>24</sup> caiva ha /

kāraṇaṃ nādhigacchāmi kathaṃcid api cintayan /12.1.42

プリター（クンティ）と彼とが似ているわけを探し求めて何とか考えたが、私には理由がわからなかった。

kathaṃ nu tasya samgrāme pṛthivī cakram agrasat /

kathaṃ ca śapto bhrātā me tat tvam vaktum ihārhasi /12.1.43

戦闘中に大地が彼の〔戦車の〕車輪を飲み込んだのはなぜか。私の兄（カルナ）が呪われたのはなぜか。あなたは今それを語るべきである。

śrotum icchāmi bhagavaṃs tvattaḥ sarvaṃ yathātatham /

bhavān hi sarvaividvidvāṃl loke veda kṛtākṛtam/12.1.44

私はあなたから一切をありのままに聞きたいのである。あなたは一切知の知者であり、この世でなされたこともなされなかったことも知っているからだ。

---

<sup>24</sup> [Tokunaga] はtavaとするが、いずれの刊本でもtasya。P版の写本ヴァリエントにもtavaはない。

vaiśampāyana uvāca /  
 sa evam uktas tu munir nārado vadatāṃ varaḥ /  
 kathayāmāsa tat sarvaṃ yathā śaptaḥ sa sūtajah /12.2.1

ヴァイシャンプーヤナは言った。

こう言われて、優れた語り手であるナーラダ仙は、かのスータの子（カルナ）が呪いをかけられた経緯をすべて語ったのである。

evam etan mahābāho yathā vadasi bhārata /  
 na karṇārjunayoḥ kiṃcid aviśahyaṃ bhaved raṇe /12.2.2

[ナーラダは言った]

大いなる腕を持つバラタの子孫よ、あなたの言うとおりで。戦闘中にカルナとアルジュナが立ち向かえないことは何もない。

guhyam etat tu devānāṃ kathayiṣyāmi te nṛpa /  
 tan nibodha mahārāja yathā vṛttam idaṃ purā /12.2.3

王よ。私はあなたに次のような神々の秘密を解き明かそう。それが、かつてどのように起こったのかを聞け、大王よ。

kṣatram svargaṃ kathaṃ gacched śastrapūtam iti prabho /  
 saṃgharṣajananas tasmāt kanyāgarbho vinirmitaḥ /12.2.4

武器で清められた<sup>25</sup>クシャトリアは、どのように天界に到達するのか、王よ。それゆえに、障害を伴って生まれた<sup>26</sup>処女懐胎の胎児が成長したのである。

sa bālas tejasā yuktaḥ sūtaputratvam āgataḥ /  
 cakārāṅgirasāṃ śreṣṭhe dhanurvedaṃ gurau tava /12.2.5

威光をそなえたその少年はスータの息子となり、あなたの師であるアンギラス族の最上者（ドローナ）のもとで、弓術を学んだのである。

<sup>25</sup> 戦士することはクシャトリアにとっては最高の名誉である。cf. [原 1968<sup>2</sup>]

<sup>26</sup> カルナの「障害」を伴う出生については1.104, 3.287-93。cf. [Fitzgerald 2004 : 679]

(112)

sa balaṃ bhīmasenasya phalgunasya ca lāghavam /

buddhiṃ ca tava rājendra yamayor vinayaṃ tathā /12.2.6

インドラ神のごとき王よ、彼はビーマセーナの力、パルグナ（アルジュナ）の俊敏さ、あなたの知恵、そして双子（ナクラとサハデーヴァ）の作法、

sakhyam ca vāsudevena bālye gāṇḍīvadhanvaṇaḥ<sup>27</sup> /

prajānām anurāgaṃ ca cintayāno vyadahaḥ /12.2.7

ガンディーヴァの弓を引く者（アルジュナ）が幼少期に持つヴァースデーヴァ（クリシュナ）との友情、そして人々の愛情を考えて身を焦がしたのである。

sa sakhyam agamad bālye rājñā duryodhanena vai /

yuṣmābhir nityasamdiviṣṭo daivāc cāpi svabhāvataḥ /12.2.8

彼は、幼少期にドゥルヨーダナ王の友となり、あなたたちによって憎まれ続けた。運命と生まれながらの性質によって。

vidyādhikaṃ athālakṣya dhanurvede dhanamjayam /

droṇaṃ rahasy upāgamyā karṇo vacanam abravīt /12.2.9

ダナンジャヤ（アルジュナ）は弓術に優れていると考えて、カルナはドローナに密かに近づいて言った。

brahmāstraṃ vettum icchāmi sarahasyanivartanam /

arjunena samo yuddhe bhaveyam iti me matiḥ /12.2.10

「私は《ブラフマン武器》について知りたいのです。呼び戻すための秘密とともに。私はアルジュナに等しい戦闘力を持てるだろう、と思います。」

samaḥ putreṣu ca snehaḥ śiṣyeṣu ca tava dhruvam /

tvatprasādād na mām brūyur akṛtāstraṃ vicakṣaṇaḥ /21.2.11

---

<sup>27</sup> D7, M1.3に従って-dhanvinaḥと読む。

「あなたは弟子にも息子にも等しく愛情を持っている。あなた [が教えてくれれば] 賢者たちは私のことを「武術を知らない者」と言うことはないでしょう。」

droṇas tathoktaḥ karṇena sāpekṣaḥ phalguṇaṃ prati /  
daurātmyaṃ cāpi karṇasya viditvā tam uvāca ha /12.2.12

このようにカルナに言われたドローナは、パルグナ（アルジュナ）を思い、カルナの意図を知って彼に言った。

brahmāstaṃ brāhmaṇo vidyād yathāvac caritavrataḥ /  
kṣatriyo vā tapasvī yo nānyo vidyāt kathamaṇcana /12.2.13

「正しく戒を行っているバラモンが《ブラフマン武器》を知るべきである。あるいは、苦行するクシャトリヤが。他の者は決して学ぶべきではない。」

ity ukto angirasāṃ śreṣṭham āmantrya pratipūjya ca /  
jagāma sahasā rāmaṃ mahendraṃ parvataṃ prati /12.2.14

このように言われたカルナはアンギラス族の最上者にあいさつして去り、ただちにマヘンドラ山のラーマのもとへと赴いた。

sa tu rāmam upāgamyā śirasā abhipraṇamya ca /  
brāhmaṇo bhārgavo 'smīti gauraveṇābhyagacchata /12.2.15

そしてラーマに近づいて、お辞儀してから「私はブリグ族のバラモンです」と、恭しく近づいた。

rāmas taṃ pratijagrāha pṛṣṭvā gotrādi sarvaśaḥ /  
uṣyatāṃ svāgataṃ ceti pṛitimāṃś cābhavad bhṛśam /12.2.16

ラーマは彼にゴートラなどをすべて訊ねて、彼と対面した。「すわりなさい、よく来た。」と。カルナはたたいそう喜んだ。

tatra karṇasya vasato mahendre parvatottame /  
gandharvai rākṣasair yakṣair devaiś ca āsīt samāgamaḥ /12.2.17

そしてカルナはガンダルヴァ、ラークシャサ、ヤクシャたち、そして神々

に迎えられてマヘンドラ山の山頂に座ったのである。

sa tatreṣvastram akarod bhṛguśreṣṭhād yathāvidhi /  
priyaś ca abhavad atyartham devagandharvarakṣasām /12.2.18  
彼はそこで矢の武器を作った。ブリグ族の最上者（ラーマ）が適切に教えたのである。神々、ガンダルヴァ、ラクシャスたちがこの上ない好意を向けてくれた。

sa kadācit samudrānte vicarann āśramāntike /  
ekaḥ khaḍgadhanuspāṇiḥ paricakrāma sūtajah /12.2.19  
ある時、そのスータの息子（カルナ）は、[ラーマの] 庵のはずれにある海岸を歩いていた。剣と弓を手にして、ひとり逍遥した。

so 'gnihotraprasaktasya kasyacid brahmavādinaḥ /  
jaghānajñānataḥ pārtha homadhenuḥ yadṛcchayā /12.2.20  
プリターの子（Y）よ、彼は偶然に一頭の雌牛を殺してしまったのである。それがアグニホートラに専念するヴェーダ学者の献供のためのものとは知らずに。

tad ajñānakṛtam matvā brāhmaṇāya nyavedayat /  
karṇaḥ prasādayaṃś cainam idam ity abravīd vacaḥ /12.2.21  
それは過失であると考えて、カルナはバラモンに知らせたのである。彼の許しを請うて、こう言った。

abuddhipūrvaṃ bhagavan dhenur eṣā hatā tava /  
mayā tatra prasādam me kuruṣveti punaḥ punaḥ /12.2.22  
「意図せずして、あなたのこの牛を殺してしまいました。私を許してください」と、繰り返し。

taṃ sa vipro 'bravīt kruddho vācā nirbhartsayann iva /  
durācāra vadhārhas tvaṃ phalam prāpnuhi durmate /12.2.23  
そのバラモンは怒って、威嚇するように彼に言った。

「悪党め！ お前は死に値する。[牛殺しの] 果報を得よ。悪者め！」

yena vispardhase nityaṃ yad artham ghaṭase aniśam /  
yudhyatas tena te pāpa bhūmīś cakraṃ grasiṣyati /12.2.24

「お前が常に競う相手、常に心を集中している相手。その者と戦うときに、大地はお前の戦車 [の車輪] をつかむだろう。悪奴め。」

tataś cakre mahī graste mūrdhānaṃ te vicetasaḥ /  
pātayiṣyati vikramya śatrur gaccha narādhamā /12.2.25

「そうして大地が車輪をつかむ時、敵が来て不注意なお前の首を落とすだろう。行け、最低な奴め。」

yatheyam gaur hatā mūḍha pramattena tvayā mama /  
pramattasya evam evānyaḥ śiras te pātayiṣyati /12.2.26

「お前がこの私の牛を殺したように、愚か者よ、敵が不注意なお前の首を落とすのだ。」

tataḥ prasādayāmāsa punas taṃ dvijasattamam /  
gobhir dhanaiś ca ratnaiś ca sa cainaṃ punar abravīt /12.2.27

そこでカルナは、そのバラモンを牛と財物と宝石によってふたたび慰撫したのである。そしてその [バラモン] は彼 (カルナ) に再び言った。

nedam madvyāhṛtaṃ kuryāt sarvaloko 'pi vai mṛṣā /  
gaccha vā tiṣṭha vā yad vā kāryaṃ te tat samācara /12.2.28

「この世の者誰一人として、私のこの言葉を無視することはない。行け、あるいはとどまれ。あるいは、お前のなすべきことをなせ。」

ity ukto brāhmaṇenātha karṇo dainyād adhomukhaḥ /  
rāmam abhyāgamad bhītas tad eva manasā smaran /12.2.29

バラモンにこう言われたカルナは落胆し、うなだれてラーマのもとに絶望して帰った。このことのみを心に思いつつ。[続く]

参考文献

1次資料

- Krishnamacharya, T.R. and Vyasacharya, T.R. 1991: *Sriman Mahābhārata*, Delhi.  
Olivelle, P. 2005: *Manu's Code of Law*, OUP.  
Sukthankar et al. ed., 1961: *The Mahābhārata*, vol. 13, pt. 1, Pona.  
Tokunaga, M, <http://www.cc.kyoto-su.ac.jp/~yanom/sanskrit/mahabharata/>

2次資料

- Bowles, A. 2007: *Dharma, Disorder and the Political in Ancient India: the Āpaddharmaparvan of the Mahābhārata*, Leiden.  
Debroy, B., 2013: *The Mahabharata*, vol. 8, New Delhi.  
Dutt, M.N., 1988: *Mahabharata*, vol. 12, Delhi.  
Fitzgerald, J.L.: *The Mahābhārata*, vol. 7, Chicago.  
Ganguli, K. M., 1981: *The Mahabharata*, vol. 8, New Delhi.  
原実, 1968<sup>1</sup> 「KṢĀTRA-DHARMA (上)」『東洋学報』51-2, 72-81.  
原実, 1968<sup>2</sup> 「KṢĀTRA-DHARMA (下)」『東洋学報』51-3, 39-79.  
原実, 1969 「KṢĀTRA-DHARMA (ADDENDA)」『東洋学報』51-4, 123-124.  
井狩彌介, 2001 『権力と権威—古代インドにおける王権と宗教伝承の諸相—』(科研報告書)  
上村勝彦, 2002-2005 『マハーバーラタ』1-8, ちくま学芸文庫.  
上村勝彦, 2006 『インド神話 マハーバーラタの神々』ちくま学芸文庫.  
山崎元一, 1994 『古代インドの王権と宗教』刀水書房.  
三澤祐嗣, 2015 『インド思想における世界構成原理の研究—サーンキヤ思想を中心として—』(東洋大学博士論文)  
中村史, 2017 『七仙人の名乗り インド叙事詩『マハーバーラタ』「教説の巻」の研究』国立大学法人小樽商科大学出版会.  
中村了昭, 1998-2000 『マハーバーラタの哲学』上・下, 平楽寺書店.  
沼田一郎, 2022 「古代インドの法の世界」藤井・手嶋編『ブラフマニズムとヒンドゥイズム1 古代・中世インドの社会と思想』法蔵館, 145-169.  
渡瀬信之, 2013 『マヌ法典』平凡社.